荒野の竪琴

串田孫一

新潮社

荒野の竪琴

一九七二年九月二十日　印刷
一九七二年九月二十五日　発行

定価六五〇円

著者　串田孫一
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　東京(03)二六〇—一一一一
振替　東京　八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取替えいたします。)

印刷　東洋印刷株式会社　製本　株式会社大進堂
© 1972 Magoichi Kushida. Printed in Japan.

荒野の竪琴　目次

幻想 11
船影 17
風見 25
泛子 31
幽境 41
秋陽 47
廃屋 57
墨狂 65
挽歌 77
窓辺 87
手紙 97
期待 105

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

晩夏 229
海風 219
夏雲 211
水音 203
骨笛 195
雨後 189
彷徨 181
濁浪 175
牧柵 165
渓流 157
入江 151
伏流 139
春光 133
楽譜 123
休憩 115

装幀　装画　著者

荒野の竪琴

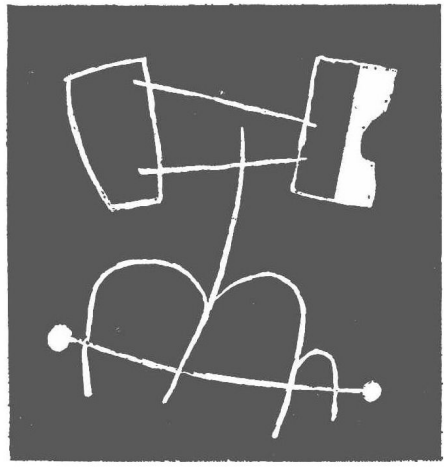
荒野の竪琴

雲が天の裏側へ爪を立て
大地を横様に睨んで群がり進む
天の悐(こら)える疼痛が僅かに伝わって来る
今日の流転の暁に
星辰は悉く赤く燃え尽き
鳥は翼をたたんで斜めに落ち
遙かな湿原の泥に突き刺さる
繰り返された豪雨もやみ
森を焼いた雷鳴も絶え
蛇を吸いあげた旋風も鎮まった
引き裂かれた草の葉の重なる蔭に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

露に似た原始の生命が
宿るものを求めて新天地の創造を夢みたが
空しく星状の砂と化した
急ぐなら急げ
一億年を急げ
永遠がもう天の向うから覗いている
蔓草の絡まる竪琴の羊腸の絃が
荒野を吹き渡る名残りの風を待って
葬送の無言歌を世界に捧げようとしている
それなら私は
星のない夜に
白骨の笛を鳴らそうか

幻想



何処を歩いているのか、幾ら考えても分らなかった。幻想風景を想い描いて、そこへ自分を置き去りにするという一種の楽しみをいつの頃からか知って、ある特殊な状態に追い込まれると、空しい足掻(あが)きをやめて、知らず識らずのうちにこんな負け惜しみのような楽しみようをする。それが次第に執拗になり、また自分ながら戸惑うほど巧妙になって行く傾向は確かにあった。だが、自分のいる場所がこんなにさっぱり分らなくなってしまったのはこれまでにない経験であった。

道を失って、森の奥深くへ迷い込んだのではなく、真白い雪の斜面で吹雪に巻き込まれてしまったのでもなく、濃い霧の中で方角が狂ってしまったというのでもなかった。

周囲の風景は、それを遮るものもないので何処までも鮮明に見渡すことは出来た。ところが、私は見えるものを否定し、聞こえるものを信じようとしなかった。そればかりでなく、今目の前に輝いている太陽は既に運動を放棄し、その太陽が燃え尽きるまで夜は来な

いものと思い込んでいた。私は既に余程前から、終りのない昼の空間をさまよい続けて来たことがやっと分って来た。そこで疲れ果てる前に、夜が訪れなくとも休まなければならない。

激しい渇きをおぼえながら水を欲しいと思わず、飢えていながら食べるものを求めない。そのまま眠った。眠る私を草が蔽って、光は幾らか弱められた。

地上でありながら、その地の果てに来ている筈の私は、こだましながら遠のいて行く人の声を聞いたように思って、目を覚ますと同時に起き上った。あたりは濃い紫にひたっていた。夜が来るらしい。太陽は流れてしまった。

やがて星が光りはじめると、私には凡庸な意識が甦えって来た。徐々に、自分でその意識の一つ一つを点検出来るくらいのゆるやかさで浮んで来た。だが意識の甦えるのに気を奪われているあいだに、何処からともなく、愛が音も立てずに舞い込んで来た。愛は私の無作法な点検を避けるために、こういう手段を選んだようだった。

愛が私の中で、意識のように甦えらなかったのは別に不思議ではなかった。それは私が見失ったものではなく、捨てたものだった。私は、捨てられた愛は枯れて、軈(やが)て私自身がそうなるように、速やかに還元してしまうものとばかり思っていた。だがそんなことをするのは随分乱暴な仕方だし、第一、まるで物を捨てるのと同じように愛も捨てられるとあ

っさり思い込んでいたとすれば、これは恐ろしい心得ちがいであった。

そうした際に、一体どういう気持であったかは詳しく想い出せないが、捨てると決心した以上は、それがどんなに貴重なものであっても、また無形のものであっても、結局は最も値打のない塵芥のように事もなげに捨てるよりほか考えられない。またそれが最も巧妙な捨て方だろうと思った。それだけを記憶している。そして捨てられた愛は何かに還元されるか、それとも完全に消滅するか、いずれにしても私の気にかける事柄ではあるまいと思っていた。

愛は冬の野の芒のように、全く枯れ死んでしまったように見えても、凍る土の中に根を生かしていて、巡り来る時を待って芽をふくようなものであったのかも知れない。そして人々はそれに気がついて、再生の悦びを否応なしに味わうような、そういう仕組に創られているらしい。

紫の夕暮れはいつものように美しかったが、それはいくらも続かずに夜になった。かつて夜は、私にとっては滅紫（けしむらさき）の可なり激しい流動であったのに、今はひたすら曖昧な闇であった。そして私の眼が覚束なくなったためもあろうが、夜はもう生々しい観念から遠ざかった。

夜に向って、広漠とした草の起伏の中に中半埋まっている時、ましてその夜が生気を失

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c